

薬

薬剤師になろうと考え始めたのは、中学2年生のトキです。化学関係の仕事をしている父、薬剤師の母の元に生まれ、小さいトキから何にでも興味を持つように育てられ、「なぜこうなるの?」「どうすればこうなるの?」などと考えていくコトを両親の背中から自然と教わってきました。

なんらかの資格を取り、聞こえる聞こえないに関係なく仕事ができるのはなんだろうかと両親とよく相談していました。理系大学の附属高校に通っていたわたしは建築系、土木系、環境系、電子工学系、プログラミング系などと幅広く分かれており、どれも興味のある分野でしたが、最終的に高校3年にあがるトキに医歯薬獣系クラスを選んだのも、やはり「最初に」決めた夢をできるだけ叶えたいというキモチが強かったのだと思います。

夢が一步進んで薬科大学に入学し、両親や友人、先生がたのご協力のおかげで確実に夢に向かって歩んで来れたと思っています。薬剤師国家試験に受かったトキも、法改正で免許が交付されたトキも、常に「薬に携わる」夢を意識して来たと思います。

そして製薬会社、薬局での勤務を経て、いまは病院で働くようになり、自分が目指す薬剤師とはなんだろうかとよく考えるようになりました。

昭和大病院 聴覚障害者外来

2007年3月3日 (土)よりスタート

毎月 第1・3・5土曜日 9:00~12:00

原則として 初診60分 (1日3枠まで)

慢性的な内科疾患全般
頭が痛い・しびれ
胸が苦しい・むくみ
ふるえなど

事前に 専用予約用紙で予約

大学病院として初めての設立

受診者数 [2007年3月~2009年3月まで]

- 受診者 38名 (うち数名通院・入院経験)

対応科

- 6種の内科 (第一内科・腎臓内科・血液内科・呼吸器内科・循環器内科・神経内科) で持ち回り

再診

- 上記内科以外に耳鼻咽喉科、泌尿器科、皮膚科、整形外科など
- ほか一般外来で通院・入院の患者さまがいる

手話通訳

- 東京手話通訳等派遣センターに依頼

病院案内ボランティア

- 手話ができる有志でローテーション

やはり「薬」を扱うというコトはヒトの命を預かるというコトになり、非常に責任の重い資格だと痛感しています。欠格条項が存在していた頃は、「聞こえないヒトは服薬指導や疑義照会のトキのコミュニケーション手段の面で難しい」という理由/思い込みが強かったと思いますが、現実的には聞こえるヒトでも聞こえないヒトでも関係なく調剤するトキは細心の注意を払っているし、むしろ技術と知識がモノをいうのだと強く感じています。

慢心的に仕事をしていると、ミスも多くなります。だから、薬剤師としてさらに一步、百歩進んで行くためにも、常に「初心」を忘れず、小さなコトでも面倒なコトでもなんでも吸収して行くキモチを持っていきたいなと思っています。それが自分を磨くコトにもなり、そしてあとに続く聞こえない後輩たちのモデルにもなれたらいいなと思います。



学

「学ぶ」コトは基本的なコトだと思います。

ヒトは母のおなかにいるトキから、母親の感情が伝わっていて胎内でいろいろなコトを聞いたりしているそうです。生まれてからすぐ学習が始まり、その吸収力は計り知れないほどだと云われています。赤ちゃんのトキは自然に吸収するコトは出来ても、物心ついてからの学習は内容や量でかなり差がついてくると思います。こうして学問的な学習、生活上での学習、ふれあいによる学習などなど、ヒトは一生を終えるまで「学び」続けています。その過程でもっと専門的な分野に行きたいと極めるのも「学」だし、趣味を極めるのも「学」です。

わたしの場合、薬学の方面に行くこと決めたからには、単にクスリのコトを学ぶだけではなく、技術的なコト、そして医療全般のコトも学び続けなければなりません。そうして自分自身がもう薬剤師として全うしたと思うまでずっと薬剤師でいられます。

そんなわたしにとって、社会福祉法人全国手話研修センター 日本手話研究所も「学ぶ」場です。テレビや新聞などで出てくる用語や、例えば裁判員制度がスタートするに伴う法律専門用語などに対応した新しい手話を考えていく中で、そのコトバの持つイミをまず理解する必要があります。その時点で、「こういうトキに使うのかあ!」「こういうイミだったのか、勘違いしていたわ!」など目からウロコ状態です。意味が頭の中にインプットされると、その用語に当てはまる手話は、意味をとらえた表現にするのか、それともイメージに合わせるのか、そのまま文字に当てはめた表現にするのか、などいろいろ考えます。

こうして自分自身もコトバをたくさん覚えられるし、最終的にはその手話が普及し、その手話表現を覚えるコトによって、ろう者も一般の方もその用語の存在を知り、意味を理解するコトができると思っています。ろう者は文章が苦手だとよく云いますが、それで終わってはいけません。書き言葉である文字から理解するのが苦手でも、手話化するコトによってその用語が頭に入るはず。そうしてたくさんコトバを覚えていってほしいなと思います。



「学ぶ」というコトは実は出会いです。「学ぶ」ために師と出会い仲間と出会います。人と人との出会いの中で新たな「学」が生まれていきます。「学ぶ」コトが出会いを呼び出合いが更なる「学び」を生み出すのです。常に「学ぶ」気持ちを忘れない年輩の方がとても魅力的なものそれだけ多くの人と出会ってきたからなのでしょう。そう思うと何気ない会話一つでも何かしら人は学ぶコトが出来るんだと嬉しくなります。



議

「へりくだるコト、控えめにするコト」の意味で「譲歩」「譲讓」など、「ゆるるコト、他に渡すコト」の意味で「譲位」「譲渡」「分譲」などがあります。

さて「ゆずり葉」の木をご存じですか？「ゆづり葉」「ユズリハ」などとも呼ばれ、俳句では「樺」と書かれる場合もあるそうです。この木は一見すると1年中緑色のままで

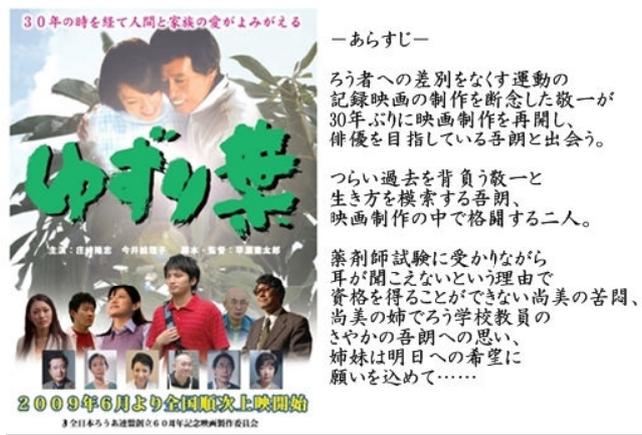


いるように見えますが、実際は葉っぱの寿命は3か月ほどで、新しい葉が成長する際に自分の栄養分を回し、そして古くなった葉は落ちていくという意味で、「子が成長してから親が譲る」のはめでたいとして正月の飾りにも用いられていました。

2007年、(財)全日本ろうあ連盟(以降 全ろう連)が創立60周年＝ヒトでいう「還暦」＝を迎え、新しいスタートを切るにあたって創立60周年記念映画を作成するコトになり、企画・脚本・撮影・編集を経て2009年6月についに全国公開されます。この映画のタイトルも「ゆずり葉」です。

創立以来、福祉活動を重ねてきた全ろう連が映画を作るという意味は大きいと思います。生きるため、自分の夢のため、理解を広めるた

め…さまざまな目的をもって大勢のろう者、健聴者がろうあ運動を重ねてきました。一つ一つの運動の中身や方法、関係者たちは違えど、全ろう連という団体は60年間変わらず歴史がつけられています。その歴史に関わってきたヒトたちは自分の時代だけではなく次世代につなげるためにやってきています。それはまさしく「ゆずり葉」そのものです。



2009年3月28日(土)完成披露試写会にて〔有楽町朝日ホール〕

いまの若いろう者たちは一見自立しているようですが、まず親から自分が生まれてきて、親や周りのヒトたちに育ててもらっています。そしてこれまでの「ゆずり葉」つまりろうあ運動によって生活や社会が変わっているなかで生かされているというコトを忘れてはいけません。コミュニケーションツールが多様化し、ろう者にとっても便利な世の中になっている反面、最小限必要なコミュニケーションに乏しくなっているヒトも増えてきています。ですから、この映画はろう運動をテーマにしつつも、一般の方々にもなにか感じて頂けたらという思いから、一般映画として笑いあり涙ありの内容になっています。



原作：早瀬憲太郎
文：広瀬恵利子
監修：全日本ろうあ連盟
発行：汐文社
四六判 212頁
定価 1,470円(税込)

ゆずり葉ウェブサイト
<http://www.jfd.or.jp/movie/info.html>